

フィリピンをもっと知ろう(連載)

247号でフィリピンの国民的英雄ホセ・リサル(1861-1896年)について紹介しました。今回は、アメリカ議会でヘンリー・A・クーバーが彼の詩を詠唱し、議会をも動かし、多くの人に感動を与えた「わが最後の別れ」(1896年)を紹介します。

ホセ・リサールの詩(1896年)

MI ULTIMO ADIOS わが最後の別れ

ホセ・リサル(1896)

訳: 永井五洋(1998年1月)

翻訳者永井五洋様のご好意でホームページ(<http://members.jcom.home.ne.jp/goyo/Welcome.html>)から
転載させていただきます。(編集部)



日比谷公園に建つ
ホセ・リサールの記念碑

さようなら、愛する祖国、太陽に愛された地、
東海の真珠、我らが失楽のエデン！
おまえに喜んで捧げよう、この哀しくやつれた命を。
たとえもっと輝かしく、みずみずしく、
華やいだ命だったとしても、やはりおまえに捧げよう、
おまえのために捧げよう。

戦場で死にもものぐるいで闘い、ためらいも後悔もなく
おまえに命を捧げる人々もいるのだ。
死ぬ場所はない。
殉死の糸杉、勝利の月桂樹、敗北の白ゆり、
刑場か荒れ野か、戦場か苦難か、
どれも同じだ。祖国と家族のためなのだから。

わたしは死ぬのだ。この空が色づき、
闇の黒衣をおしやり、ついに一日が始まる時に。
もし、おまえの夜明けを染めるくれないが要るのなら、
日の出のその時わが血を注ぎ、まき散らすがいい。
そしてその清新な光で
わたしの血を金色に輝かせてほしい。

一途な少年の日のゆめ、
血潮たぎる青年の日のゆめ、
それはいつの日か、東海の珠玉よ、
おまえの黒い瞳に涙なく、
つややかな額は凜として、表情のくもりも、
恥じらうこともない姿を見ることだった。

わが生涯のゆめ、今なお燃え立つ望み、
幸あれ！ 去りゆく魂が叫ぶ。
幸あれ！ ああなんと素晴らしい。
おまえに翼を与えて倒れるのは、
おまえに命を与えて死ぬのは、
おまえの空のもと死ぬのは、
そしておまえの麗しの大地でとこしえに眠るのは！

いつの日かわたしの墓のくさむらで
つつましく咲く花を見たら、
おまえの唇に寄せて、わたしの魂に触れてほしい。
それでわたしは額に感じるのだ、冷たい墓石の下で。
おまえの息づかいにやさしさとぬくもりを。

月は静かにやさしくわたしを照らすがいい、
朝日はひとときの輝きを放つがいい、
風は重々しくうなるがいい。
そして一羽の鳥が舞い降りてわが墓標にとまったら、
その鳥はやすらぎの歌をうたうがいい。

陽は燃えたちて、雨を乾かし、
空に戻すがいい、わたしの叫びをたずさえて。
友がわが早死に泣くのもそっとしておくがいい。
そして静かな夕べ、わたしのために祈る人があれば、
祖国よおまえも祈ってほしい、わが休息を神に。

祖国よ祈りを捧げてほしい。運なく倒れた人々に、
すさまじい暴虐をたえ忍んだ人々に、
悲痛にうめく哀れな母たちに、
親や夫をなくした人々に、拷問に苦しむ囚われ人に。
そしておまえ自身に祈りを。
いつの日かおまえが救済されるように。

そして、夜のとばりが墓場をつつむ時、
ただ死者のみがそこで孤独に夜を明かすのだ。
その安らぎを乱さないでほしい、
その秘めごとをあばかないでほしい。
豎琴の調べが聞こえてきたら、
それがわたしだ。愛する祖国よ、
おまえのために歌うわたしだ。

そしてわたしの墓も人々から忘れ去られ、
十字架も墓石も無くなったなら、
そこがすき返され、耕し広げられてもかまわない。
わたしの灰は無に帰するのではなく、
おまえの大地を敷きつめるのだから。

それならもうおまえから忘れられようと構わない。
おまえの大気を、空間を、野山を、
わたしは渡り歩こう。
そしてわたしはなろう、
みずみずしく清らかな調べに、
香り、光、彩り、そよめき、うたごえ、うなりに。
わたしの信じることを繰り返しながら。

敬愛の祖国よ、わが苦悩の中の苦悩よ。
愛するフィリピナス、最後の別れを聞いてほしい。
おまえにみなを託そう、両親も、愛する人々も。
わたしは行くのだ。奴隷も刑吏も抑圧者もないところへ、
信仰が人を殺さぬところへ、神の統べられるところへ。

さようなら、わたしの家族、いくつもの思い出、
幼き日の友達、もう還らないぬくもりの。
疲れし日のやすらぎに感謝を。
さようなら、いとしい異邦人（ひと）、
わが友にしてわが喜びの。
さようなら、大好きな人たち。
死とはやすらぎなのだ。